

幼稚園に關する諸問題(二)

佐々木吉三郎

二、智育

兒童は、人類性質の縮圖であると云はれて居通り、殆ど、あらゆる心のはたらきが、芽生えを出して居るのでありますから、吾々は、たゞ、それを、障害なく、完全に、發達させることを大切と心得るだけの話であります。成長する處の精神は始終、何等かに従事することが大切なので、働かなければ發達は出來ない。これは云ふまでもない話であります。どうしたら、子供の精神を最よくはたらかせ得るか。大人であれば、むづかしい問題を出しても、工夫を要する事でも、無形な抽象的な事でも、皆よく精神をはたらかす手段となりますが、幼兒の精神を最強くひきつけ、盡く興味を感ぜしむるには、どういふやうに、精神をはたらかしめたならよいかといふと、どうしても、

10
 抽象的のものをさせて、まづ、覺官に訴へる具體的のものを示さねばならぬ。否、單に、具體的な對象を見せたり、聞かせたり、即ち、廣い意味の直感をさせるだけでなく、更に、一步を進めて、なるべく、その事物を取り扱はせて、物に親しましむるといふ事が、一層有効である。そこで、幼兒の保育教育を目的とする處では、皆、それらの手細工なり、物をいぢくつて遊ぶ遊戯なり、所謂作業といふものを課するやうになつて居るのは、教育を子供風に工夫した結果で、極めて、大切なことでもあります。かやうに、教育上、兒童の實地の活動(セルフアモチビチー)を先頭におりものは、フレイベル氏を以て始めとするので、その以前の教育者は、かゝる點には、あまり注意をむけなかつたのであります。かのコメニウス氏などは、よほど、常識に富んだ教育説を立てた人であります。が、あの人も、覺官、知覺、言語、思考などを注意したに過ぎなかつたのであります。が、フレイベ

ルに至つて、實際のはたらきによつて教育するといふ事を強く認めたので、氏は「爲す事、しかも、自分で爲すこと、自分で作ること、自分で、なにかに従事することによつて、子供は成長するもので、それからして、次第に、直覺を主とする時期、言語を以て説明する時期、思考を練る時期といふやうに進むものである」と云うて居る。(コメニツスなどのやうに、繪本などで學ぶよりは、活動ではじめるがよい。さうすると、一層深き愛情、感動を惹き起して、その製作物は、自己内界のうつしとなる。自然生活、人間生活を餘所事と見ないで、自分の實感的な生活と見るものである」と申し居りますが、つまり、單に、外界から、智識を領收せしむる目的である場合には、覺官的に紹介する、もし、それが、子供等の製作作業に適したものであつたならば、必ず、自己製作に訴へるといふやうにして、分量の多くを食ふよりも、或る事柄に深く、目を以て、耳を以て、情を以て、手

を以て、全心を以て交際せしむるといふ事につとめなければならぬと思ひます。これによつて、幼児が、あんまり、あれもこれもに氣を配るばかりで、きよろ／＼として、神經過敏になる弊を防ぎ得ると同時に、落ちつきのある深い觀察をさせ、勞働を喜び、手の器用なども、同時に發達させることが出来ると思ひます。さうして、具體的、覺官的にやる間に、耳、目、口、鼻等の各種の覺官が、自然に、始終はたらかせられることになるのであります。ところが、よくこれをばきちがへて、覺官練習など、云ふ機械的方法をやつて、子供を受動的に立たすだけにするのは、私の、全然、賛成せぬ所でありませぬ。そんな人工的な事をしなくても、相當の考ある人がやれば、自然に出来るものであると思ふのであります。

要するに、幼稚園が、子供の智識界を開拓するといふ事は、子供の自然の發達階段に應じて、その要求のあるだけ進めるので、あまり、こちらから、

考へ過ぎたあてがひをせぬ方がよい。物の名、言葉の意味、材料、道具の性質、使用法等は、皆、必要に應じて、自然に覚えさせるやうになし、歌などを教へても、なるべく、精撰して、歌の詞などは、度を歌つて居る中に、自然に覚え込むといふやうになし、お伽噺や、いろ／＼の物語をして見も、直に、それをお話せよとか、個條をあげて見よとかいふやうに、機械的の記憶を強いることなく、たい、やはらかに、ほんやりと、子供の心の中に感じて居る位が、最、程のよいところではないかと思ひます。

三、美育、德育

これについては、云ふべきことは澤山ありませうが、私は、此中の五つだけを、こゝに申して見たと思ふのであります。

一、幼稚園は、極、大切な條件として、愛情の流れて居るところでなければならぬと思ひます。幼稚園の保母は、母親の代理であり、愛の權化でな

ければならぬ。これは、保母の第一の資格であると思ひます。學問もあるにこした事はなく、技藝も出味るにこした事はないが、私は、そんな事よりも、その保母なる人の胸の中に、盡きぬ愛の泉があつて、その真心から出た情の美しい花が、目でも讀まれ、手にもあらはれ、幼児等が、その保母の姿を見ると、何とも云へぬ慕はしい、やさしい、なつかしい感じの起るやうにならなければならぬ。これは、もとより、容易の事ではないが、始終、理想として置かなければならぬものであると思ふ。

學校と、家庭との長所、短所を區別する一つは、たしかに、この愛といふ條件である。學校といふものは、大勢の子供を一樣に取り扱ふ點から、やゝもすれば、子供を、ナンバー即ち番號として取扱ふ。下足札を渡すやうに、どなたのはきもので、特別扱ひはしないで、兵隊さんの靴も、奥様の空氣草履も、皆、そこに、すらりと並べるとい

ふやうに、一つ／＼についての注意をしないで、
 とかく、たい、番號として見るといふ傾きをもつ
 ところが、家庭は、血肉の親しみといふ事の外に、
 子供の數が少い點から、その子に對して、特別に
 注意し、それに對する愛情を多くもつて居るとい
 ふ事は、これは、云ふまでもない事である。無論、
 その結果、家庭は、愛に溺れるといふ弊があり、
 學校には、公平なる愛といふ長所もあるが、幼稚
 園の如きは、なるべく、寝るから起きるまで、ま
 たは、起きるから寝るまで、一切萬事を、母親が
 世話をして居る。その母親の直接代理である。實
 をいへば、母親の膝の上から、その愛の手から離
 れてはならない時期の子供をばなしてつれて來る
 のであるから、この愛の缺乏を子供等に感せしめ
 ないやうにするのが、極めて大切であると思ひま
 す。それで、私は、理想的方法としては、まづ、
 いつでも、氣分のよい、にこ／＼とした、愛に富ん
 だ人を選び、幼児が、その保母を慕ふこと、日ま

わり花が、お天日様の方へむくと同じやうにあり
 たいと思うのであります。
 二、次に、幼稚園で大切な事は、自然物を愛する
 やうにしむけるといふ事でありませう。これも、幼
 稚園に従事して居らるゝ方々の既に氣づいて居ら
 る處とは思ひますが、歐米各國の幼稚園と比べ
 て見ると、まだ劣つて居るといはなければなるま
 いと思ひます。殊に、英國などの幼稚園では、カ
 ナリヤとか、雲雀とか、いろ／＼の小鳥を飼つた
 り、お部屋のぐるり、もしくは運動場のぐるりにそ
 れ等の鳥籠や、兎のとやがり、それから、金魚
 その他の魚類を飼つておくが、それ等の爲めに備
 へてある大きな鉢や、いろ／＼の物が、奇麗に陳
 列せられてあつて、しかも、それが雇人や、小使
 の手にかけて、先生が、子供等と一所に、朝、
 幼稚園に來るなり、「さあ、ジョージさん、あなた
 は金魚の餌をもつて來て下さい」とか、「アンナさ
 ん、そこから、お水をもつて來て頂戴」といふや

うにして、小水族館の世話に、三十分も、一時間
 も、それ以上もかゝつて居る。なんと、楽しい、
 上品な、活きた作業でありませぬか。紙を剥んだ
 りなんかして居るよりも、遙かにおもしろい意味
 のあるものでありませんか。此の事については、
 いづれ、あとで、十分お話することもあらうと思
 ひますが、むかふでは、凡べて、かういふやうに、
 小さい時から、動物を可愛がる事を注意し、また、
 植物などに對しても同様で、植木鉢の手入れなど
 は、非常に喜んでやり、また、やることに奨励し
 て居ります。それで、むかふでは、子供は、殆
 天性といひたいほど、犬でも、猫でも、馬でも、
 小鳥でも、皆可愛がります。寧ろ、可愛がり過ぎ
 て困る。たとへば、犬を飼つておくと、子供が、
 可愛いあまりに、犬と、接吻したり、猫のお皿と
 一所にして、食事をしたりすることがあるほどで
 可愛がり過ぎる方の弊がある位である。ところが、
 我が國の子供は、犬にでも遇ふと、真先に泣き出

すか、少し、大きくなれば、直に喧嘩ごしになつ
 て、棒か、石かで、對抗運動を始める。かうなる
 と、動物も、自己防衛の方から、勢ひ、牙をむい
 て起たなければならぬ羽目になる。そこで、馬
 でも、牛でも、日本の家畜は、猛獣である」と、
 或る西洋人が批評したやうになつてしまふ。これ
 は、我々の誠に残念とする性質の一つである。と
 うか、植物園にゆく時、動物園にゆく時、むしろ、
 お猿さんにも、お土産をもつて行つてやらう。公園
 にゆく時にも、雀のおみやげに、パンをもつてゆ
 くといふやうな、しほらしい、高尚な情をやしな
 いたいものであります。

三、社交的と云はうか、天真爛漫と云はうか、人
 間の愛と云はうか、人に對して、愛情のあるノン
 ピリした子供を養成したいと思ふのであります。
 日本の馬や、犬や、猿が人を見れば、直に、敵と
 思うて、蹴つたり、噛んだり、ひつ掻いたりする
 やうに、日本の子供は、どうも、他人を見ると、

泣き出したり、はにかんだり、なにか問はれても口を一つ聞かなかつたり、どうも、ひねくれた、不自然なところが多い。もつと、無邪気でノンビリとしてやりたい。これは、小さな時から、もし、お仲間などに對して、うちとけて、お互に楽しく遊ばせるといふ事をやり、次第々々に、子供等の交際範圍が廣くなるにしたがひ、あまり人を恐れず、いやに、臆病な人見知りをせぬやうな子供にしむけることが出来やうと思ひます。此の點は、やはり、幼稚園の任務の一つであらうと思ふのであります。家庭だけでは、子供の交際範圍が狭いのであつて、幼稚園は、やがて、子供の社會學の第一巻目でありますから、意地腐れの子供を治療して、あまり、わるすれにすれた子供でもない、無邪氣な、さつぱりした、人に問はれたならば、知つて居る事は、知つて居るといひ、知らぬ事は、知らぬと返事の出来るやうな子供にしたいたいものと思ひます。

四、審美的教育に注意するといふ事も、幼稚園が務めねばならぬ任務の一つと思ひます。一體に、今日の學校生活といふものは、私は、ゑらい不潔な、不精なものと思つて居ります。近頃は、歐米各國では、學校の建築などに、非常に金をかけて、子供が、家庭で養はれた美感を、學校で毀してしまはないだけには、ゆき届いて居るのみならず、貧民教育などをするやうな處、又は、小さい子供に對しては、たとへば、托兒所の如きは、實に、設備が立派なもので、恐らく、あんな貧民の子弟が、一生の中、こんな注意の届いた取り扱ひを受ける事は出来まいと思ふやうな設備をして居ります。ところが、日本では、大抵の處は、家庭よりも不潔で、不精である。學校に来て見ると、家のお庭のやうに、草木が植ゑてあるかといふと、甚だ廣い處に一本のろくな木もなく、砂ほこりが、思ふさま飛び舞つて居る。床板を見ると、宅の玄関や縁側のやうになつては居ない。土足でこゝこ

と上るのだから、板の目も見えぬ様になつて居る。この他、何處を見ても、随分、没趣味な殺風景な境遇を形作つて居ります。

これでは、いつたい、困るではないか。さういふ學校に、八年も、九年も通うて、殺風景な生活をすると、その人間は、やはり、世の中の秩序といふ事も知らない、言語、舉動が粗暴野卑で、不穩な思想感情を有し、社會に立つて、どことなく、出來て居ない人間といふ感じを與へる。學者と云ふ事と、教育あるといふ事とは違つて居るので、學問は出來なくても、ゲビルデテンシエン即ち教育のある人、陶冶のある人といふものがあるのである。

それで、大體に、私は、學校教育といふものは、もつと、趣味を高め、人品を高尙にするやうにしむける必要があると思ふ。それであるから、幼稚園の如きは、やはり、家庭となるべく、あまり事情のちがはぬやうに、急に殺風景な、製造場のやうな處にうつされたといふ感じの起らぬやうに

注意して、或は、一輪の花を挿すもよからう、或は圖畫、手工などの場合に、色合ひのよい配合のうまく出來て居る繪なり、品物なりを見せて、美を樂しましむるやうにとめるもよからう。或は、創作力の基礎を與へて、次第に、眞に、美の鑑賞が出來る人たらしめむるもよからう。此等何れも人その氣のついて居ることに相違ない任務の一つであらうと思ひます。

五、その他も規則正しく、學校に來て、新たな、よい習慣を作るといふのも、一つの重要な任務であつて、とかく、家庭に居ると、世話が届き過ぎたりする爲めに、子供が依頼心を多くし、あまり、規則正しい生活に慣れる事がなかつたのが、大抵の事は、時間通りにやるとか、お仲間同志扶持してやるとか、自分だけで、ある仕事を任せられて、自治的にやるとか、甘やかしては駄目で、命令には、従順でなければならぬとかいふ權に、いろいろの良習慣を養ふ事が出來る。此の點は、無論、家庭でも出來ないことではないが、幼稚園は、殊に、やりよい地位にあるものと考へてよからうと思ひます。(以下次巻に愛護)